

# 明・崇禎帝の諡号について（2）

The Posthumous Titles of Ming Emperor Chongzhen (2)

滝 野 邦 雄  
Takino, Kunio

## （2）

『國榷』によると、李自成が北京から出奔した直後<sup>(1)</sup>の五月一日に北京で崇禎帝が弔われたという。

北京の故の□□道御史の曹溶 自ら西城を巡視し、臣民 先帝（崇禎帝）の爲に喪を發し、位を都の城隍廟に設くと傳う。僞兵政府右侍郎の梁兆陽・僞□科諫議大夫の孫承澤・僞弘文館編修の高爾儼<sup>など</sup>等<sup>これ</sup> 亦た焉に預る。僞直指使の張懋爵・柳寅東・韓文銓・朱郎鏞は各自 巡城御史と爲り、民詞（民間の訴狀）を受け、奸宄<sup>ただ</sup>を核すこと甚だ力む。午後、吳三桂が建虜（清）を止め城に入ること母らしめ、僅かに頭目のみ東宮（明の皇太子）を護りて至ると傳えられ、都人 幸甚なりとす。然れども、李自成 西奔し、夜に太子（崇禎帝の第一子の慈烺）及び永（崇禎帝の第四子の永王慈炤：欽定『明史』による）・定（崇禎帝の第三子の定王慈炯：欽定『明史』による）二王を弑す。或いは云う、吳三桂 太子を送りて入京せんことを請うも、建虜（清） 許さず。[吳] 三桂 夜に太子を太監の高起潛の所に送る、と。

（1）『小腆紀年附考』に、

丙戌（二十九日）、闖賊 帝を僭稱す。是の夜、宮殿を焚きて西走す（『小腆紀年附考』卷第五・清世祖順治元年（一六四四）四月丙戌（二十九日）条）。

とあり、蔣良騏『東華錄』卷四・四月「丁亥（三十日）」条に、

丁亥（三十日）、羅公店<sup>マカオ</sup>に次す。賊 已に西遁すると聞き、諸王貝勒等をして兵を率いて急ぎ追ひ之を撃たしむ（蔣良騏『東華錄』卷四・四月「丁亥（三十日）」条）。

とある。

又た云う、[高起] 潛 民間に逸れ、陰かに之を導きて皇姑寺に入る、と(『國權』 卷一百一・六〇八二頁・思宗崇禎十七年・「五月戊子(初一日)」条)。五月一日に北京で臣民が崇禎帝の喪を発して、都の城隍廟に位牌を置く。そして、張懋爵・柳寅東・韓文銓・朱郎鏐がそれぞれ治安の維持にあたった。午後になると呉三桂によって明の皇太子が清の首脳に護衛されて北京の戻ってくるという噂が広まる。しかし、李自成が逃げ出す前に、崇禎帝の三人の王子を弑していた。ただ、呉三桂が明の皇太子を擁して入城しようとしたが、清政權が許さなかったので、宦官の高起潜のところに送り届けたともいう。また、高起潜は民間に逃れ、皇太子を皇姑寺に導き入れたともいう(崇禎帝の子については、孟森「明烈皇殉國後紀」(一九八四年中華書局第二次印刷『明清史論著集刊』上冊所収参照)。

二日には、沈惟炳と駱養性<sup>(2)</sup>とが崇禎帝を午門で哭臨し、皇太子を迎える準備をした。

北京の故の吏部左侍郎の沈惟炳・錦衣衛左都督の駱養性 諸臣に約して、先帝を午門に哭臨す。[駱] 養性 法駕を随備し東宮を迎えんとす(『國權』 卷一百一・六〇八二頁・思宗崇禎十七年・「五月己丑(二日)」条)。

ところが、翌日の三日に入城してきたのは清の攝政王ドルゴンであった。

(2) 乾隆四年(一七三九)重修『世祖實錄』は、北京入城を二日に掛けて、その様子を次のように述べる。

[崇禎十七年・順治元年五月] 己丑(二日)、師 燕京に至る。故明の文・武の官員出でて五里の外に迎う。攝政王和碩睿親王 朝陽門に進めば、老幼 香を焚きて跪きて迎う。内監 故明の鹵簿・御輦(天子の車)を以て皇城の外に陳ね、跪きて路左に迎え、王の乗輦を啟く。王 曰く、予は周公を法として冲主を輔くれば、當に輦に乗るべからず、と。衆 叩頭して曰く、周公 曾て負扈(政務をとる)して國事を攝めれば、今は宜しく輦に乗るべし、と。王 曰く、予 來りて天下を定むれば、衆意に従わざる可からず、と。鹵簿を將<sup>も</sup>つて宮門に向かいて陳設し、王の儀仗は前に列し、樂を奏せしむ。[ドルゴン]は 天を拜して三跪九叩頭の禮を行ない、復た關を望みて三跪九叩頭の禮を行う。畢りて、輦に乘りて武英殿に入り、陞り座す。故明の衆官 俱に拜伏し、萬歳を呼ぶ。王 令を下して諸々の將士 乘城す。[しかし] 廝養(奴僕)の人等は概して入るを許さず。百姓もて安堵さし、秋毫も犯す無し(乾隆四年(一七三九)重修『世祖實錄』 卷五・順治元年五月己丑(二日) 条)

清の攝政王湯鵠泰（ドルゴン） 北京に入る。時に鹵簿（儀仗隊） 朝陽門に出で、臣民 塵を望みて道左に伏す。止めたる輦に升輿（乗車）するは則ち胡服にして頎身（長身）なり。臣民 相い顧みて色を失う。關寧兵は已に先驅して都門に入る。城上は俱に白旂（白旗）を立つ。攝政王 鸞輿に乗り、萬騎 之を夾む。武英殿に入居して稱制（皇帝の代理となる）す。故の戸部右侍郎の王鰲永 入りて謁せんと欲す。上下を見るに俱に地に坐す。乃ち潛<sup>ひそ</sup>かに出づ。都人 各々其の素幘（葬礼に用いる白色の頭巾）を去る。景色 慘黯（昏暗）たり（『國權』 卷一百一・六〇八三頁・思宗崇禎十七年・「五月庚寅（三日）」条）。

北京の臣民が朝陽門の外に出て、御輦（天子の車）を置いて待ち受ける。その御輦に乗ったのは胡服の長身の人物であったので、臣民は色を失った。關寧の軍は先に入城し、城壁には、白旂（白旗）が立つ。攝政王ドルゴンは、天子の乗り物である鸞輿に乗り、まわりをたくさんの騎馬が囲んでいた。そして、宮中の武英殿に入り、稱制した。明の戸部右侍郎であった王鰲永が、拝謁しようとしたところ、皆は地べたに座っていたので、こっそりと抜け出した。北京の人々は素幘（葬礼に用いる白色の頭巾）を脱いだ。その様子は慘黯としていた、という。

乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』によると、ドルゴンは李自成を非難したうえで、崇禎帝の喪を五月四日に発し、崇禎帝の忌明けとともに薙髪するように命じたとする。

攝政王和碩睿親王 故明の官員・耆・老・兵・民に諭して曰く、流賊の李自成 原より係れ故明の百姓の醜類を糾集し、京城を逼陷し、主を弑し屍を暴し、諸王・公主・駙馬・官・民の財貨を括取し、刑を酷くし虐を肆にす。誠に天人 共に憤り、法の誅を容れざる者なり。我れ敵國と雖も、深く用<sup>も</sup>って憫傷す。今、官・民の人等をして崇禎帝の為に喪に服すること三日、以て輿情を展べしむ。禮部太常寺に著して帝の禮を備えて葬に具えよ。除服の後、官・民 俱に著して制に遵いて薙髪せよ。論 下りて官・民

大いに悦び、皆な我朝を頌して仁義 萬代に聲施すとの云<sup>しか</sup>いう（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷五・順治元年五月辛卯（四日）条）。

『國榷』によると、五月六日に北京の官民が帝王の廟に崇禎帝の位牌を設けた。ただし、その前の三日の夕暮に清政権が、皇帝の礼服二着を殿前に燃やしたという。

北京の官・民 先帝を哭臨し、帝王の廟に設位（位牌を設ける）す。三日の鋪時（夕暮）、清虜（清） 遺袞（皇帝の礼服）二<sup>かさね</sup>た襲を搜し、殿前に馳焚す（『國榷』卷一百一・六〇八八頁・思宗崇禎十七年・「五月癸巳（初六日）」条）。

徐鼐の『小腆紀年附考』（咸豐十一年〔一八六一〕成る）にも、南明政権が喪を發したこの五月六日に清政権が崇禎帝を哀悼したとする。

〔崇禎十七年（一六四四）五月〕癸巳（初六日）、明 崇禎帝の爲に喪を發す。

是の日、我が攝政王も亦た臣民に命じて、崇禎帝の爲に舉哀（大声で痛哭して哀悼する）す（『小腆紀年附考』卷第五・清世祖順治元年五月・「壬戌（初六日）」条）。

そして五月六日の喪を發した日に、崇禎帝の諡号・廟号が定められたとする。……令を傳うるに、〔崇禎十七年・順治元年五月〕初六日癸巳よりして、始めて崇禎帝の爲に帝王の廟に設位し、哭臨すること三日とし、諡して「懷宗端皇帝」と爲し、周后を「烈皇后」と爲し、田楊妃の寢園に改葬す、と。賊に従い最も著れる熊文舉・楊枝起・朱徽の如き者は、亦た前の穢<sup>そそ</sup>を瀦ぎ、同じく哭臨す。時に都民 餘寇を搜し斬ること已まず。因りて令を下して薙髮する者は賊に非ずとす。是に於いて官民 悉く薙髮し遣す無し（『小腆紀年附考』卷第五・清世祖順治元年（一六四四）五月・「庚寅（初三日）」条）。

五月二十二日になると、宣府巡撫の李鑑（字は在懸、号は涵白。四川安縣の人。？～順治五年〔一六四八〕。崇禎元年戊辰科〔一六二八〕三甲百七十七名の進士）が、李自成軍の賊將を捕らえて、崇禎帝に供えたという。その日、清

政権は、崇禎帝を葬っている。

己酉（二十二日）、宣府巡撫の李鑑 偽權將軍の黃應選・偽防禦使の李允桂等十五人を捕らえ斬りて、以て明の崇禎帝を祭る<sup>(3)</sup>……○禮を以て明の崇禎帝・后及び妃袁（袁）氏・兩公主、並びに天啟〔帝〕の後張氏・萬曆〔帝〕の妃劉氏を葬る。仍お陵墓を造るは制の如くせよ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷五・順治元年五月己酉（二十二日）条）。

乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』によれば、さらに翌順治二年十一月二十一日に、吳三桂が崇禎帝の陵の修理費として一千両を出す。もっとも、これは自分の殉難した一族のために卹典を賜うのが主な目的のようであるが。

己巳（二十一日）、平西王吳三桂 奏して言うに、臣（吳三桂）前朝の知遇を受くること最も厚し。因りて故主の為に仇を報ぜんと欲し、乃ち命を新朝に歸す。今、既に忠を新朝に<sup>ちか</sup>矢うも、又た何ぞ故主を忘恩するに忍びんや。恭しく聖恩を荷いて崇禎帝の陵を修葺（修理）するに、臣 敬して銀一千両を捐して、陵の工を抑佐す。更に臣の父母、并せて繼母祖氏、及び第三輔の俱に寇難に死するを祈念し、優に従いて卹を賜わんことを乞う。臣職と子心と兩つながら自展するを得るを庶う、と。疏 入り、旨を得、工の銀兩を助け、數を照らして察収（査収）せよ。應に卹典を得べし。詳議して具奏せよ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷五・順治二年十一月己巳（二十一日）条）。

管見の及ぶかぎりでは、これ以後、順治十四年（一六五七）二月十一日まで「崇禎帝」についての記述は、乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』には見えない。

さて、北京に居を構えた清政権は、六月十五日に、江南の人たちに対して詔を出し、自己の政権の正統性を宣言する。

〔崇禎十七年〔一六四四〕六月〕辛未（十五日）、清虜 詔を江南の人に馳

（3）蔣良騏『東華錄』卷四・五月辛丑条にも、

宣府巡撫の李鑑 賊偽權將軍の黃應選等十五人を捕らえ斬りて、以て崇禎帝を祭る（蔣良騏『東華錄』卷四・順治元年五月辛丑条）。

とある。

せて〔以下のように〕曰く。予 聞くに共に天を戴かざる者は、君父の仇なり、災を救い患を<sup>あわ</sup>卹れむ者は、隣邦の義なりと。<sup>②</sup> 惟れ爾が大明太祖高皇帝（洪武帝）、胡元を斥逐し、我が仇國を<sup>ほろぼ</sup>剪し、永世に民を<sup>なだ</sup>宥む。<sup>こも</sup> 代ごも哲王有るも、末造に<sup>ぬす</sup>迄び、吏 偷み民 窮まり、羣盜 野に滿つ。然れども大行崇禎皇帝 恭儉の心を乗り、仁孝の行いを弘くし、徳高く世替わる。〔しかし〕惟れ日々不寧にして、蠢<sup>きようぼう</sup>茲する逆賊の李自成なる者、狗盜の雄にして、<sup>きようぼう</sup> 鴟張獸視して、累世の深恩を忘れ、滔天の大惡を逞しくし、京師に蹂血（大量殺人）し、皇后を逼隕し、宮寢を焚焼し、縉紳を流毒し、金銀を以て營窟と爲し、百姓を視ること草菅の如くす。「皇天 震怒し」（『書經』泰誓上）、日月 光無し。我が大清皇帝 義 切に仇を同じくし、恩深もて弔伐す。六師 方に整い、蟻聚（結集）し忽ち奔りて、虜遺を斬馘すること、川盈谷量（きわめて多い）にして、游魂（虫の息のもの） 西遁す。指日（日ならずして）遺を擒えんとして、予 用て馬を燕京に息め、茲の黎庶を撫す。〔そして〕爾が大行皇帝の爲に縞素三日し、喪祭して哀を盡す。欽みて謚して懷宗端皇帝と曰い、陵を思陵と曰う。梓宮 <sup>こ</sup> 聿に新たにし、寢園 増ます固し。凡そ諸々の后妃、各々禮を以て葬り、諸陵の松柏 樵すること勿くす。惟れ爾が率土の臣民の情を大行皇帝に致さんと欲する所の者なり。我が大清 <sup>つぶさ</sup> 曲に斯の誠を體せざる無く、崇ぶ有りて闕靡し。宗藩の失職流離する者は、爾が爲に存卹（救済）し、士紳の忠節もて難に死する者は、爾が爲に表揚し、刑を軽くし賦を薄くし、賢を用いて能を使い、<sup>③</sup> <sup>まこと</sup> 苟に生民を濟い、「惟れ力のみ是れ視る」（『春秋左氏傳』僖公二十四年）。深く爾が明朝の嫡胤の遺無く、勢い孤 立ち難きを痛む。〔そこで〕我が大清の宅を此の北土に移し、「兵を<sup>と</sup>厲ぎ、馬に<sup>まぐさ</sup>秣し」（『春秋左氏傳』僖公三十三年）、必ず醜類を<sup>ほろ</sup>殲ばし、以て萬邦を清くす。〔清王朝は〕「天下を富めりとするの心有るに非ず」<sup>④</sup>、實に中國を救うの計を爲す……〔割注：中書舍人の華亭の李雯が草する所なり〕（『國權』卷一百二・六一一八頁・思宗崇禎十七年六月辛未〔十五日〕条）。

- ①『禮記』曲禮上には「父の讐は、與に共に天を戴かず」とあり、「君」字はない。
- ②『春秋左氏傳』僖公十三年に「天災 流行するは、國家 代ごも有り。災を救い隣を恤<sup>あわれ</sup>むは、道なり。道をおこなえば、福有り」。
- ③『周禮』天官・大宰に「八統を以て王に萬民を馭することを詔<sup>つ</sup>ぐ……三に曰く賢を進むこと、四に曰く能を使うこと……」。
- ④『孟子』滕文公下に「四海の内 皆な曰く『湯王は] 天下を富めりとするに非ざるなり。匹夫匹婦の爲に讎を復するなり』と」。

清政権は、李自成が崇禎帝の明王朝を滅ぼしたので、その仇を討つために軍事行動を取って、民衆を救ったという。そして、崇禎帝に諡号・廟号を贈ったりして、礼を尽くした。ただ、明王朝に正統な後継者がいなかったため本土に侵入することになったが、決して「天下の富を目当てにする（天下を富めりとする）」という気持ちがあったわけではなく、「中國を救う」ためであったと主張するのである。このように清政権は、南明政権より先に崇禎帝の諡号・廟号を「懷

✓ (4)『大義覺迷錄』によると、曾静の発言として、次のように伝える。

李雯 華亭の人。甲申（順治元年〔一六四四〕）の後、北幕に入る。「與史道鄰（史可法）書」及び「下江南詔」は皆な其の筆なり。[「下江南詔」の] 中に「六合<sup>てんか</sup> 一にして、秦隋 平かなり」・「禮學 興りて干戈 息む」の句有り。人 傳えて之を嗤う（『大義覺迷錄』卷四・四葉）。

李雯とは、

李雯、字は舒章、江南の上海の人。力學して古えを好み、陳子龍と名を齊しくす。明の崇禎の間、雯の父の逢申 謫戍（在官者が犯罪によって革職、辺外に發遣され、戍役にあたること）を被る。而るに其の罪に非ざれば、雯 叩闥陳辨し白（弁明）するを得。闖賊 京城を破るに洎<sup>およ</sup>び、[父の李] 逢申 節を盡くして死す。順治の初め、廷臣交ごも雯の才 用う可しと薦め、内院中書を授けらる（『國朝耆獻類徵初編』卷百三十九・十七葉所引『述聞謹瑤錄』）。

というような人物であった。

また、談遷の『北遊錄』では、李雯についてつぎのようにいう。

[李雯] 華亭の李雯舒章。甲申に燕に寓し、清に仕えて中書舍人と爲る。凡そ大制（國家大法）の作は多く其の手に出づ。少宰の陳名夏 内翰林に推陞せんと欲す。學士の胡統真・御史の張端 欲せざるなり。給仕中の陰潤<sup>そそのか</sup>を嗾し少宰（陳名夏） 樹私（私利をはかる）すと劾す。[そして、陳名夏は] 奪祿三月たり。[李] 雯は内艱（母の喪）あるも、奔喪するを允されず。後、告歸すること一載。即ち入朝せんとするに、中暈（熱中症）にて道に卒す（『北遊錄』紀聞下）。

宗端皇帝」と決め、六月十五日には江南の人たちに対して布告した。すでに(1)で検討したように、この時、南明政権は、擬撰を命じただけで、諡号・廟号は決まっていなかった。

この六月十五日の詔によると、五月六日に定められたという崇禎帝の諡号・廟号は「懷宗端皇帝」である。しかし、六月二十四日『清代檔案資料叢編』所収の題本によれば「二十五日」に清の順天巡撫の宋權（字は元平・平公、号は雨恭。自ら歸徳老農と号す。諡は文康。河南商丘の人。萬曆二十六年〔一五九八〕～順治九年〔一六五二〕。天啓五年乙丑科〔一六二五〕三甲七十七名の進士）は「治平三策」として三つの要請を行なっている。

順天巡撫の宋權 「治平三策」を獻ず。一、崇禎の廟號を議し、以て我が朝の厚德を彰かにするを請う。一、加派弊政を禁革し、以て民生<sup>やすま</sup>を蘇す。一、廣く賢才<sup>つる</sup>を羅ね、以て上理を佐く（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷五・順治元年六月庚辰〔二十四日〕条：蔣良騏『東華錄』卷四・順治元年六月条は「順天巡撫の宋權 「治平三策」を獻ず。一、崇禎の廟號を議するを請う。一、加派弊政を禁革す。一、廣く賢才を羅ね」とある）

崇禎帝の廟號を決め、重税・悪政を改め、有能な人物を集めよというのである。『清代檔案史料叢編』にはこの全文が収められており、その「崇禎の廟號」の箇所は次のようになっている。

一 崇禎の廟號を議し、以て至徳を彰かにせんことを請う。歴代の帝王必ず廟號有り。其の禮 甚だ重し、其の義 甚だ嚴なり。念うに舊主 御宇すること十有七年、聲色寶玩は毫も嗜む所無し。天下を治むを思うも、臣下 心を盡して職業する能わず、以て民窮まり寇の起こるを致し、卒に篡弒の禍を成す。臣 毎に清夜に捫心（反省）し、死するも餘辜有り。幸いに聖主 賊を殲<sup>ほろ</sup>ぼし復仇（あだ討つする）し、祭葬するに禮を以てし、毎に令旨を捧げ、惓惓として明朝を以て念と爲し、朱姓 概して故爵を錫えば、凡そ血氣有るものは感泣せざるは無し。倘し天恩隆重にして、敕して廷議に下し、廟號を定め以て萬世を光かし、天下に詔布せば、即ち三尺



の童も、誰が大聖人の「仁の至り、義の盡くせる」(『禮記』郊特牲)を誦せざらん。四海 檄を傳えて定むるは、端<sup>すべ</sup>て此の舉に在り……順治元年六月二十五日<sup>ママ</sup>題す(『清代檔案史料叢編』第十三輯・中國第一歷史檔案館編・中華書局・一九九〇年刊・順治初年籠絡與控制漢族官紳史料・3 順天巡撫宋權題爲敬獻治平策本・三頁)。

歴代の帝王には必ず廟号がある。崇禎帝は専心に政務を執ったが、臣下が怠慢で、亡びることになった。これは、慙愧に耐えないことである。それを清政権があた討ちをし、故明のことに気を配ってくれた。まことにすばらしいことである。もしも、崇禎帝に廟号を贈ってもらえれば、皆が感激し、南方の平定はここから始まることになるという。

この提案に対して、

七月初二日、奉けたる令旨に「崇禎の年<sup>ママ</sup>號・賦税を蠲免するは、俱に旨有り…」と(『清代檔案史料叢編』第十三輯・中國第一歷史檔案館編・中華書局・一九九〇年刊・順治初年籠絡與控制漢族官紳史料・3 順天巡撫宋權題爲敬獻治平策本・三頁)。

とある。崇禎帝の廟號を決めることと免税とは認められたようである。

六月六日に諡号・廟号・陵名が決められながら、六月二十四日(二十五日)に「崇禎の廟號を議」という提案がなされていることは、諡号・廟号を「懷宗端皇帝」・陵名を「思陵」としているのは、仮のものであり、宋權は改めて崇禎帝の廟号を定めるべきだとしたのだろうか。または、それぞれの日付に混乱があるのだろうか。

いずれにせよ、清政権は北京に進出したすぐの時期に、崇禎の諡号・廟号を「懷宗端皇帝(正式には、「欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝懷宗端皇帝」)」、陵号を「思陵」としたようである。

そして、乾隆四年(一七三九)重修『世祖實錄』によると、順治元年六月二十七日に明の太祖と明の諸帝の位牌を歴代帝王の廟に移す。

攝政王和碩睿親王 大學士の馮銓を遣りて故明の太祖及び諸帝を祭らし

む。文に曰く、茲に流寇の李自成 明室を顛覆し、國祚 已に終う。予逆寇を驅除し、鼎を燕都に定む。惟うに明 一代の運に乗じて、以て天下を有つ。歴數 轉移すること、四時の遞禪するが如し。獨り有明のみ然りと爲すに非ず。乃ち天地の定數なり。宗廟の主 別所に遷置するに至りては、古より以來、厥れ成例有り。第だ曾ては一代の天下の主と爲るを念いて、宜しく輕々しく褻すべきこと罔く、茲に以て之を移置す。故に官をして祀り、別所に遷すを告げ遣む（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷五・順治元年六月癸未（二十七日）条）。

明王朝が滅びた原因は、「国祚（国運）」が尽き、流寇の李自成に滅ぼされた。清政権はこの李自成を滅ぼして中原に居を構えたというのである。もしもの通りだとすると、清政権は明王朝から政権を奪ったことにならない。そこから、崇禎帝に「懷宗」という廟号をあたえたのであろうか。ただし、亡国の君に「宗」をつけるのは異例である。

なお、『國権』では、明の位牌の移動を六月二十八日に掛けている。

清虜 我が太廟の主を易え、高皇帝（太祖 / 洪武帝）の主を歷代帝王の廟に奉ず（『國権』卷一百二・六一二六頁・思宗崇禎十七年・「六月甲申（二十八日）」条）。

さて、『明季北略』（康熙十年（一六七一）成る）によると、崇禎帝に「懷宗端皇帝」と諡したのは李明睿<sup>(5)</sup>であったという。

思宗、光宗の子、熹宗の弟なり。丁卯（一六二七年）八月即位し、戊辰（一六二八年）崇禎に改元す。太祖 戊申（一三六八年）に洪武と建元してより、今の戊辰に迄るまで共に二百六十載<sup>ママ</sup>なり。帝 位に在ること十七年にして、甲辰の變ありて、身を以て國に殉ず……大清朝の攝政王（ドルゴン）燕に入り、明の詞臣の中允の李明睿に諡號を議すを命ず。[李] 明睿 帝に諡して「懷宗端皇帝」と爲し、周皇后を「烈皇帝」と爲す。故に大清は紀せば則ち「懷宗」と稱す。時憲に従うなり。而れども草野 無知にして、或いは「思宗」と稱し、又た間に「毅宗」と稱する者あり。舊

聞を傳うればなり。……李明睿は、江右南昌の人なり（北京琉璃廠半松居士木活字刊本『明季北略』巻之四・一葉・崇禎元年戊辰・「思宗烈皇帝」条）。この諡を李清は次のように批判する。

新朝（清朝）の廟號を遵議するの人の「懷帝」と稱せずして「懷宗」と稱するが若きは、尤も異なり。何れの家の「宗」なるかを知らざるなり。金の「哀宗」[というの]は乃ち其の末主の承麟（末帝）の諡する所なり。我が明は止だ元の庚申君に諡して「順帝」と曰うなり（『三垣筆記』筆記中・崇禎）。

前王朝の皇帝である崇禎帝に「懷宗端皇帝」として「宗」をつけるのは不適切であるというのである。

後の文献であるが蕭爽の『永憲錄』（乾隆十七年〔一七五二〕成る）においても李明睿のつけた諡に「宗」があることを非難する。

明・崇禎帝の甲申五月、我朝（清朝）明の臣の中允の李明睿を以て禮部右侍郎と爲し、故の君・後の諡號を議せしむ。議して上りて「懷宗端皇帝」と曰い、後は「烈皇后」と曰う。與朝を以て前代の君に諡するに、理として「宗」を稱せず。後の禮臣具奏し、改めて「莊烈愍皇帝」と爲す。「思

✓ (5) 李明睿、字は太虛、号は閩翁・大椿堂。江西南昌の人。天啓二年壬戌科〔一六二二〕三甲二百四十九名の進士である。乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』によると、順治元年〔一六四四〕十一月三日に「不恭」によって革職となっている。

禮部侍郎の李明睿 朝祭行禮 不恭なれば命じて革職して民と爲す（乾隆四年〔一七三九〕重修『世祖實錄』巻十一・順治元年〔一六四四〕十一月丁亥〔三日〕条）。また、『三垣筆記』には次のようにいう。

李翰林明睿天啓壬戌〔の進士〕、南昌の人。閩逆の都に入るに當りて、曾て夾まる。後、北に仕えて禮部右侍郎と爲る。其の先帝に懷宗端皇帝と諡し十六字を備え、又た周后端皇后と諡するは、皆な〔李明睿の〕擬する所なり。已にして、儀を失いて職を削られ、遂に海に浮かびて南歸す。疏中の言う所の「逼勒（強迫）され入朝すれば、小酋（満州族）を見ても、拜せず。殺されるに幾し<sup>ちか</sup>。幸いに乘間（機会によって）逃歸す」とする者は、皆な飾詞なり。既にして南都に抵り<sup>いた</sup>、同志の阮大鍼等と城外に酬飲すること數日、竟に入覲（皇帝に見える）せず。識者之を非とす（『三垣筆記』筆記下・弘光）。

順治元年 / 崇禎十七年（一六四四）十一月三日に革職となつてから後に、南京で阮大鍼などと会つたという。

宗烈皇帝」に至りては則ち偽弘光の諡する所なり。國初の人の文集 多く誤り稱す。或いは「莊烈陵」と曰うは、固より名は「思陵」なり（『永憲錄』卷一）。

やはり、前王朝の皇帝に「宗」をつけることは、理論上成り立たないという。

そもそも、諡号・廟号における「宗」は、どのような意味があるのだろうか。顧炎武は、南明政権が崇禎帝の諡号を議論していたときに「廟號議」という意見書を提出する。そこにつぎのようにある。

臣 之を聞くに「禮」に曰く「祖に功有り、宗に徳有り」<sup>(6)</sup>と。昔、商の時に在りて、賢聖の君六七<sup>おこ</sup>作りて「宗」と稱する者は三、太宗・中宗・高宗なるのみ。漢室の興りて、文を太宗と曰い、武を世宗と曰い、宣を中宗と曰う。惠・景・昭の三帝は皆な「宗」と稱せず。是れ「帝」は以て君人（國君）の統に繋ぎ、「宗」は以て前人の徳を表するを知る。<sup>こ</sup>是を以て「帝」は桃し、「宗」は桃せず。此れ「仁の至り、義の盡くせる」（『禮記』郊特性）なり。本朝（明朝）は唐・宋の制に循い、二祖以下の列聖は、「宗」を稱せざるは無し。建文君及び景皇帝<sup>①</sup>（景泰帝 / 景帝）の若きは、皆な帝位を履みて終わらず、故に〔第九代皇帝〕憲宗（成化帝）の郕戾王（景泰帝 / 景帝）に追諡するや、「恭仁康定景皇帝」と曰う。夫れ「帝」と稱し以て其の仁を致すも、「宗」と稱し以て其の義を致さず、萬世の下、復た議す可き者無し……（『亭林餘集』・「廟號議」）。

①兄の第六代皇帝の英宗が土木の変で捕虜になったため、第七代皇帝となる。英宗が帰還して、対立する。景泰八年（一四五七）または天順元年（一四五七）に景帝は重病となり、第八代皇帝として英宗は復位する。そしてまもなく景帝は歿する。

「祖」がつけられる者には功績があり、「宗」がつけられる者には徳があるという。漢代までの例からすると、「帝」とつくのは帝位を受け継いだことを示し、「宗」をつけるのは徳があったことを表わす。しかし、明朝は唐朝・宋朝の例に倣い、太祖・成祖以下の皇帝には「宗」をつけている。ただし、建文帝と景泰帝（景

帝)とはそれぞれの理由から例外であるというのである。

趙翼(字は雲崧、号は甌北。江蘇陽湖の人。清・雍正五年〔一七二七〕～嘉慶十九年〔一八一四〕。乾隆二十六年辛巳恩科〔一七六一〕一甲三名の進士)も『廿二史劄記』において、次のようにいう。

按ずるに漢制に、開國の君は「祖」と稱し、以下は則ち俱に「宗」と稱す、と。

✓(6) ここで顧炎武のいう「禮曰祖有功而宗有德」は、『史記』卷十・孝文本紀に、

孝景皇帝元年十月、制詔御史曰、蓋聞古者祖有功、而宗有德……。

とあり、また『漢書』景帝紀に、

元年冬九月、詔曰、蓋聞古者祖有功、而宗有德。

とあるものを踏まえていると考えられる。もしくは、「禮」ということばがかぶせられている、『後漢書』卷一・光武帝紀第一上・「世祖光武皇帝諱秀、字文叔」条の李賢注の、

禮「祖有功而宗有德」、光武中興、故廟稱「世祖」。

か、『孔子家語』辯物篇であるかもしれない。

顔師固(南朝・陳の太建十三年〔五八一〕～唐の貞觀十九年〔六四五〕)は、『漢書』景帝紀のこの箇所に次のように注している。

應劭 曰く、始めて天下を取る者を「祖」と爲す。高帝 高祖と稱するは是れなり。

始めて天下を治める者を「宗」と爲す。文帝を太宗と稱するは是れなり、と。[顔]

師固 曰く、應[劭]の説は非なり。「祖」は、始なり。始めて命を受くるなり。「宗」は尊なり。有德 尊ぶ可し、と。

應劭は始めて天下を取った者「祖」といい、天下を治めるようになった者を「宗」とするという。顔師固は、應劭の説を否定し、始めて天命を受けた者が「祖」であり、徳があり尊ぶべき者が「宗」とであるという。

王先謙(字は益吾、号は葵園。湖南長沙の人。清・道光二十二年〔一八四二〕～民國六年〔一九一七〕。同治四年乙丑科〔一八六五〕二甲七十五名の進士)の『漢書補注』(光緒二十六年刊)は宋・劉攽と王啓原(字は理菴。湖南湘潭の人:『漢書補注』「同時參訂姓氏」による)とを引用して顔師固の説を批判・補足する。

劉攽 曰く、顔の説は非なり。始めて命を受くる者は「太祖」と稱するのみ。有功なる者も亦た「祖」と稱す。商の祖甲<sup>①</sup>は是れなり、と。王啓原 曰く、「祖有功、而宗有德」は『孔子家語』廟制篇<sup>②</sup>に以て孔子の言と爲す。據るに足らずと雖も、『後漢書』光武帝紀注に其の文を引きて、「禮に云う」とす<sup>③</sup>。蓋し佚禮の文ならん。

①廟制篇に「孔子 曰く、…古は有功を「祖」として有德を「宗」とす。『孔子家語』辯物篇に「子 曰く禮に有功を「祖」として有德を「宗」とす。故に其の廟を毀たず」

②『後漢書』卷一・光武帝紀第一上・「世祖光武皇帝諱秀、字文叔」条の李賢注に「禮に「祖に功有り、宗に德有り」と。光武 中興す。故に廟を「世祖」と稱す」。

劉攽によると、始めて天命を受けた者のみが「太祖」という。その他の功績がある者は、創業の主でなくても、商の祖甲のように「祖」をつけることができるというのである。

……「祖」は功を以てし、「宗」は徳を以てす。原より必ずしも一つの「祖」の外は再び「祖」を稱するを得ざるには非ず。然らば亦た須く其の功を<sup>はか</sup>捌りて之を「祖」とすべし。創業・中興は世に大功有り、之を「祖」とするは可なり……（『廿二史劄記』巻十四・十一葉～十二葉・「後魏追諡之濫」条）。漢制には、創業の主には「祖」とし、それ以下の君主には「宗」をつけるとある。しかし、一人に「祖」をつけてしまったら、もう「祖」をつけることはできないということはない。功績をかながみて「祖」をつけるかを考えるべきであるという。

そうして、王鳴聲（字は鳳喈、一の字は禮堂、号は西莊。江蘇嘉定の人。清・康熙六十一年〔一七二二〕～嘉慶二年〔一七九七〕。乾隆十九年辛甲戌科〔一七五四〕一甲二名の進士）は、『十七史商榷』において、つぎのようにいう。

〔王鳴聲が〕案ずるに漢より以下、廟號・諡法は皆な各々一字なるのみ。惟だ東晉・蕭梁・北魏・北齊は兩字の諡有り。唐 始めて數字を累ねて諡を爲す。説は已に前に見ゆ（巻七十六・「尊號諡法廟號陵名」条）。亾國の君の若きは、或いは諡無し。但だ「少帝」・「末帝」と云うは、即ち有るも、一字に過ぎず。豈に宜しく數字を累ねて諡を爲し、且つ「宗」と稱して守文なる者と同じくせんや……（『十七史商榷』巻七十六・十葉・「哀帝諡號」条）。

唐朝までは、廟號・諡法はだいたい一字であった。亡国の君には、諡がないか、あるいは「少帝」・「末帝」ということもあるが、一字にすぎない。亡国の君に、いくつも文字を並べた諡をつけたり、「宗」をつけたりすることがあろうかとするのである。

このように、亡国の君に「宗」をつけることは、諡号・廟号の制度にそぐわないし、崇禎帝を有功の君主として認めたことになる。

清政權も、さすがに不適切と考えたのか、順治十六年十一月二十七日（西暦：一六六〇年一月九日）に諡号は「莊烈愍皇帝」と改められる。乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』によると、その経過は、次のようである。

まず、順治帝は、順治十四年（一六五七）二月十一日に崇禎帝の碑文を作り

その陵前に碑を立てるように命ずる。<sup>(7)</sup>

甲申、工部に諭するに、朕（順治帝） 故明の崇禎帝を念うに尚お孜孜として求治の主と為す。祇だ非人を任用するを以て、卒に寇亂を致し、身は社稷に殉ず。若し亟かに闡揚を為さざれば、恐らく千載の下、竟に徳を失いて國を亡ぼす者と同類として並び觀らる。朕（順治帝） 是れを用<sup>も</sup>つて特に碑文一道を製し、以て憫惻の意を昭らかにす。爾が部 即ち諭に遵いて碑に<sup>ほ</sup>勒り、崇禎帝の陵の前に立て、以て不朽を垂れん、と（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一百七・順治十四年二月甲申〔十一日〕条）。崇禎帝は熱心に政治を行なったが、用いる人を間違え、混乱に陥り、社稷に殉ずることになってしまった。ここで、表彰しなければ、これまでの失徳の君と同類とされてしまう。そこで、順治帝みずから碑文を作成して同情する気持ちを明らかにするというのである。

その二年後の順治十六年（一六五九）三月十五日に、順治帝は、碑文の撰を金之俊（字は豈凡。諡は文通。浙江嘉興の人〔『清史列傳』卷七十九・貳臣傳甲・「金之俊」条は江南吳江の人とする〕。?～康熙九年〔一六七〇〕。萬曆四十七年己未科〔一六一九〕三甲十二名の進士）に命じる。

…明の崇禎帝の碑を立つるに大學士の金之俊に命じて文を撰せしむ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一二十四・順治十六年三月丙午〔十五日〕条）。

（7）徐乾學撰『讀禮通考』（康熙三十五年〔一六九六〕序・冠山堂藏板）に引く『肅松錄』によると、崇禎帝の碑亭はつぎのようなものであったという。

『肅松錄』 思陵碑亭は南北四丈八尺、東西 之の如し。宮門は三つ。亭を距つこと十一歩。階は三つ。惟だ中門に棟宇有り、廣さ二丈四尺。脩（高さ）は三丈。饗殿は門を距つこと十三歩。階は三つ。臺無し。殿は三楹、廣さ七丈二尺。脩は四丈二尺。内に香案 一つ、青琉璃 五器。全設一つの神牌の高さ二尺五寸。石青（藍色の鮫物顔料）もて龍を雕り、邊は金を以て之に泥して題して「大明欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈愍皇帝」と曰う。中楹を煖閣と爲す。長榻（隔）六扇あり。中に木主三つを供う。中は則ち莊烈愍皇帝なり。左は則ち周后なり。右は則ち田妃なり……（『讀禮通考』卷九十三・葬考十二・山陵六・「莊烈愍皇帝思陵」条所引・三十一葉）。

その碑文のなかで、金之俊はいう。

明の〔歴〕史を讀む者は、咸な崇禎帝の天下を失うや、徳を失うの故に非ず、總じて人臣の國を謀りて忠ならざるの致す所に由るを知る。後の人臣と為る者は、悚然と戒むる所を知り、而して後の人君と為る者も、亦た人を用いるに慎むを知るを庶うなり…（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一二十四・順治十六年三月丙午〔十五日〕条）。

順治帝の順治十四年（一六五七）二月十一日の碑文の意図にしたがい、崇禎帝を失徳の君ではなく、臣下が不忠だったためであるというのである。

こうして、順治十六年十一月二十七日（西暦：一六六〇年一月九日）に諡号は、「莊烈愍皇帝」と改められる。

〔順治十六年十一月二十七日〕禮部に諭すらく。前明の崇禎帝 勵精にして治を圖ること十有七年。不幸にして寇亂ありて國 亡び、身は社稷に殉ず。其の生平を考えるに、甚だしき失徳無く、茲の厄運に遭<sup>あ</sup>うは、殊に矜憫（憐憫同情）に堪<sup>た</sup>ゆ。〔そこで〕宜しく諡號を加え、以て實行（德行）を昭かにすべし。今、諡して莊烈愍皇帝と爲す。爾が部 即ち諭に遵いて行なえ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一百三十・順治十六年十一月甲申〔二十七日〕条）。

崇禎帝は、政務に勤めること十七年で国が亡んで、それに殉じてしまった。その生平を考えると、甚だしい失徳はないのに、この不幸に出会うのは憐憫に耐えない。そこで、諡号を撰して、崇禎帝の徳行を明らかにした、というのである。ここで諡号を新たにしたことから、改めて崇禎帝の祭祀を行なっている。

〔順治十七年正月〕癸酉（十七日）、故明の崇禎帝に追諡し「莊烈愍皇帝」と為すを以て固山額真伯の佟六十を遣りて祭りを陵寢に致さしむ（乾隆四年（一七三九）重修『世祖實錄』卷一百三十一・順治十七年正月癸酉〔十七日〕条）。

ただし、徐乾學撰『讀禮通考』（康熙三十五年〔一六九六〕序・冠山堂藏板）に引く『北游紀方』によると、崇禎帝の碑には「大明欽天守道敏毅敦儉弘文襄



武體仁致孝莊烈愍皇帝」とあるが、神主は「大明懷宗欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈端皇帝」とあり北京入城直後に決めた廟号の「懷宗」が付け加えられ「端皇帝」となっている。

〔『北游紀方』〕思陵の神碑は高さ二尺五寸、石青の地もて龍を彫り、金字もて「大明欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈愍皇帝」と書す。其の神主は則ち「大明懷宗欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈端皇帝」と書す……（『讀禮通考』卷九十三・葬考十二・山陵六・「莊烈愍皇帝思陵」条所引・三十二葉）。

このように清朝では、北京入城直後に、崇禎帝の諡号・廟号を、

欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝懷宗端皇帝

としたものの、亡国の君主に「宗」をつけるという不備があった。そのため、順治十六年十一月二十七日（西暦：一六六〇年一月九日）になって、その廟号を取り消し、

欽天守道敏毅敦儉弘文襄武體仁致孝莊烈愍皇帝

と改めた。「懷宗端皇帝」を「莊烈愍皇帝」に変更したのである。

では続いて、南明政権と清政権とが、諡号・廟号にどのような意味をこめていたのかを検討してみたい。

(つづく)